

学びの場としての地域と学生の志向 —教養科目としての可能性—

鶴崎 健一*

Region as Place of Learning and Tendency for Students Who Select Lessons in Liberal Arts:
The Possibility of Regional Science as Liberal Arts

Ken-ichi TSURUSAKI*

ABSTRACT

In order to consider what structure of learning system could be beneficial to the students, we analyzed the present situation of education utilizing the regional place as a liberal arts subject in Fukuyama University. Education that utilizes the regional place is important to master liberal arts and is necessary for citizens. We believe that active learning using field work, group work and so on is necessary for education that utilizes the regional place. However, we found that there are few students enrolled in those subjects using teacher centered lecture styles in liberal arts subjects. This suggests that they are not popular. On the other hand, the satisfaction level of students of these subjects is not necessarily low. In order to lead students to actively select the subjects utilizing the regional place in liberal arts subjects, it is necessary to clarify the connection to specialized departmental education and to construct classes that make it easy to understand the importance of liberal arts subjects utilizing the regional place.

キーワード：地域学、教養教育、地域連携、アクティブラーニング、
フィールドワーク

1.はじめに

昨今の大学、特に地方の私立大学においては、地域の知の拠点としての役割を担うとともに、地域で活躍する人材の養成が責務となっている。著者の所属する福山大学についても、地域に根ざした大学として地域で活躍できる人材の育成と地域に関わる研究を追求している。それぞれの学部学科の取り組みはもとより、大学のブランディング推進のための研究プロジェクトとして「瀬戸内の里山・里海学」を立ち上げ、2017年度には「瀬戸内海 しまなみ沿岸生態系に眠る多面的機能の解明と産業支援・教育」というテーマで、文部科学省の「私立大学ブランディング事業」に採択され、研究が進められている¹。また、福山大学が位置する福山市西部の松永地域の活性化に学生が関わる「松永駅前活性化プロジェクト（通称：プロジェクトM）」も進められている。さらに2018年度には、福山大学が位置する福山市東村町の方々の協力で田植えを行い「かかし米」作りに携わった。これらは、知の拠点としての

*大学教育センター兼任教員・共同利用センター教授

取り組みや地域で活躍する人材の養成の取り組みの一例と言える。

また、「備後地域の風土、文化、芸術、経済および産業を学んで地域をよりよく理解し、地域を育み、地域に貢献する精神を涵養する」という学習目標のもと、教養科目の科目群として「地域学」を設置している。この科目群は2つのカテゴリーに分けられ、1つは地域の防災リーダーの養成のため防災士認定試験の受験資格を得ることを目的とした科目群であり、もう1つは福山大学が位置する備後地域を題材に地域について学修する科目群である。この備後地域を題材に地域について学修する科目群について、鶴崎（2018）（2017年度の『大学教育論叢』第4号）²『教養科目としての地域学の課題と展望-福山大学での取り組みを例として-』において、その構成をもとに、地域学という学問体系について検討し、大学教育、特に、教養教育における地域学の展開とその可能性について論じた。その中で、地域学における学生の履修志向における課題についても検討を行い、教養科目でのフィールドワークなどのアクティブラーニングを活用した授業については、受講希望者数が少なく展開の難しさが示唆された一方で、受講した学生の満足度は決して低くなく、学生の学力や興味関心の向上を期待できる授業となる可能性を示した。

そこで今回は、教養科目における地域を活用した学習がその教育目標と学生の志向と合っているのかを検証し、これらの学習の将来性を検討する。また、学問領域としての地域学の発展についても考える。

2.教養科目「地域学」群での地域との連携

福山大学における教養科目としての地域学は、鶴崎（2018）²の図1（p.75）に示したように「備後地域学」、「備後に学ぶ地域の課題」および「松永に学ぶ産業と文化」の3つの科目で構成されている。また、以下のようにそれらを基礎的な内容から応用的な内容となるよう有機的に結びつけることによって、地域に関する知識、技能、態度の全ての学習目標を達成できるように構成されている。

つまり、

『まず、「備後地域学」で地域に関する知識を網羅的に学習し、地域を知る（知識の習得）とともに地域への興味関心を涵養する。次に、「備後に学ぶ地域の課題」で地域における様々な課題の解決策を体験学習やグループでの議論を通して考えることで、課題設定や知識の応用（技能の習得）やコミュニケーション能力の向上（態度の習得）を図る。そして、「松永に学ぶ産業と文化」で地域に関する事項について自ら課題を設定し学習することで、専門的な知識の習得に留まらない自学自習の楽しさ（学問の楽しさ）を知り、さらに、学習成果を発表することでプレゼンテーション能力の向上を図る。』

という構成である。

これらの科目は、地域との協働で成り立っている。「備後地域学」については、備後地域に関わる活動をしている学内教員（平成30年度：6名）はもちろん、備後地域に造詣の深い学外講師（平成30年度：2名、「備後地域の歴史」と「備後地域の自然環境」）および行政について福山市の職員（平成30年度：3名、「備後地域の広域連携」、「福山市の都市計画」および「福山城築城400年の取組」）によって講義を行なっている。「備後に学ぶ地域の課題」は、福山市企画財政局企画政策課と計画し、2015年から経済環境局環境保全課の協力で、福山市に位置する一級河川の芦田川の見学、水質検査体験等を行うフィールドワークをもとに、イメージアップについて考える授業を行なっている。「松永に学ぶ産業と文化」は、福山市教育委員会文化課（現在の環境経済局文化振興課）による提案をもとに計画し、松永はきもの資料館を活用した授業として展開している。つまり、大学と地域との強い繋がりが大切な科目であるため、地域に根ざした大学を標榜している福山大学にとって、重要な科目群である。

3.地域学科目の現状と課題

「備後地域学」、「備後に学ぶ地域の課題」および「松永に学ぶ産業と文化」の3つの科目は、上述のような学習目標の達成のために授業内容を検討し展開している。一方で、これらの科目を実施して以降、問題や課題も増えてきたので、授業の現状と課題についてまとめる。

「備後地域学」は、多くの教養科目で実施しているのと同じ座学による知識の習得が主たる目的である。備後地域を主題とするため、題材となる分野は、歴史的なもの、社会科学的なもの、地理学的なもの、自然科学的のものなど、非常に幅広い。境界領域を対象とした学際的内容であり、地域学という名称にふさわしい科目と考えられる。受講生数も比較的多く（2018年度：99名）、学生へも十分に認知された科目と考えられる。一方、できるだけ幅広い知識を対象として講義を行うため、境界領域を対象とする地域学らしいのかもしれないが、鶴崎（2018）²の表1に示すように、雑学的色彩が強く、また、地域のトピックスを紹介するといった内容になる部分がある。受講生に対する授業評価アンケートにおける授業に関する全体的な感想や意見として、「色々な話が聞けるので、面白いです。備後出身じゃない人が聞いても面白いです。（2016年度）」、「備後地域学講義をとって良かったです。講師先生から多く知識を得て学べて聞けること大変貴重なことだと思います。少ない講義を物にしていきたいと思います。（2016年度）」、「今まで、備後地域学で学んだように、福山についてのことを、深く知る機会はなかったので、とてもおもしろかったです。今まで以上に、自分の今住んでいる地域に関心を持つことが出来たので、この講義をとってよかったと思いました。（2014年度）」、「頭に入れておいて得をするような内容が多くおもしろかった。この大学だからこそできる授業だと思う。（2014年度）」など、授業全般について良い評価の記述が比較的多く見られた。その反面、「講師方によって違うが、話が最終的にどこに向かっているかはつきりせず、結論がよく分からない状態で進んでいくのでどこが重要なかはつきりせず、分かりにくい回があった。（2017年度）」、「〇〇の人や〇〇、〇〇の先生など、専門用語が多すぎるのと、授業が毎回違いすぎて頭に入ってきてません。（2017年度）」、「内容によってはおもしろかったが、少しわかりにくい部分もあった（2015年度）」、「あまりためになると感じるものがなかった。なにをさせたい授業なのかよく分からなかった。（2014年度）」、「眠たくなるものもあったので、もっときくだけでなく、自分達が何かするというのが全体的にみてもあればよかったのではないかと思う。（2014年度）」といった意見もあった。授業への満足度についてみても2014年度：3.73、2015年度：3.94、2016年度：3.61、2017年度：3.76³であり、福山大学の講義全体の平均（4.0～4.1）と比べて低い評価であった。これらは、オムニバス形式における講師側の質の確保の難しさ、および、幅広い知識を対象とした学問であることを受講生に理解してもらうことの難しさを示していると考えられる。これらの課題を解決するために、年度ごとに特定のテーマに絞って実施することも考えられるが、受講生が毎年変わることから半年間で実施する現在の科目設定では難しい。

「備後に学ぶ地域の課題」は、「課題設定や知識の応用（技能の習得）やコミュニケーション能力の向上（態度の習得）を図る」ことを目的としているので、授業に用いる題材を任意に選ぶことができ、科目内で1つのテーマについて探求することができる。また、数年間類似の課題での実施も可能である。フィールドワークなども設定することができ、かつ、グループワークを行うので、授業形態が確立されると学習効果の高い授業となりえる可能性がある。一方で、受講生が学部学科を問わない上、主に1年次生を対象とした科目であるため、専門性の高い内容で実施することが困難であるため、協働いただいている行政機関との内容調整を慎重に行う必要がある。また、フィールドワークやグループワークを実施するためには、学習効果を高めるためには十分な事前準備が必要である。この科目を開講した時から協

力いただいている福山市経済環境局環境保全課の担当者は、福山市で企画しているふくやま環境大学での指導や小中学生向けの環境啓発講座などの経験があり、フィールドワークの事前指導やグループワークの際にも、大学教員と遜色のない指導を学生にしていた。しかしながら、指導経験の少ない行政部局に協力いただくことになると、行政の担当者が過重負担に感じる可能性が高い。本科目を開講して4年が過ぎ、特定の担当部局への負担を避ける必要もあり、企画財政局企画政策課と新規のテーマへの移行を検討しているが、目処が立っておらず、負担に関する懸念が現実となっている。また、これまでの受講生数は毎年10名弱で推移しており、教養科目としては少ないためフィールドワークやグループワークの指導は個々の学生に対しても、担当教員と行政担当者できめ細かく行うことができ、成績評価も難しくはない。現在、成績評価は、担当教員による簡易なルーブリック（授業中の態度、発言状況、リーダーシップの有無など）での評価、各個人から提出されるレポートでの評価、グループワークの成果物の評価で行なっている。今後、受講生が増加すると現在の体制では個々の学生への指導や態度を含めた成績評価も難しくなる可能性がある。特に、態度を含めた成績評価については、学生間での評価も含めるなど客観性を高めたルーブリックなどの評価方法の確立を進める必要がある。

「松永に学ぶ産業と文化」は、「自学自習の楽しさ（学問の楽しさ）を知り、さらに、学習成果を発表することでプレゼンテーション能力の向上を図る」目的とし、通年で実施しているので、「備後に学ぶ地域の課題」では難しい専門的な探求をある程度行うことができる。専門的な探求をするためには課題設定をするための最低限の知識や知的探究心そして資料等の取得方法の知識などが必要であり、それを補完するために松永はきもの資料館の見学を行ない、個別に丁寧な指導を行うこととしているが、大学に入学したばかりの1年次生には少し難しい科目と考えられる。そこで、この科目は1年次生でも受講可能なのだが、「備後地域学」と「備後に学ぶ地域の課題」を受講した2年次生以上の学生や専門科目をある程度受講しその幅を広げたいと考えている学生が受講することを想定して開講し、シラバスにも明記している。しかしながら、実際を受講生は、2017年度は1年次生が4名、2018年度は1年次生1名と2年次生2名であり、必ずしも想定した学年の学生が履修してはいない。さらに、2018年度に受講した2年生2名についても「備後地域学」と「備後に学ぶ地域の課題」のどちらも受講しておらず、地域学群全体で考えた学習目標に沿うことになっていない。また、この科目は受講生への個別指導としている。開講後の受講生は3~4名であり、1名の教員が担当することで同質の指導や評価ができた。しかしながら、今後受講生が増加した際には複数の教員が同質の個別指導や評価を行う必要がある。すでに、この科目の担当部局である大学教育センターの教員が受講生数に応じて担当するという体制は整えているが、指導方法のコンセンサス作り、および、ルーブリックなどを活用したレポートや発表に対する客観性の高い成績評価方法の開発が課題として残っている。

4.地域学科目に関する学生の受講に対する志向

鶴崎(2018)²(pp.75-76)において、福山大学で毎年実施している共通教育科目の改善を目的とした学生による討論会で「地域を創造する」というテーマのもと学習科目を検討してもらった結果、アクティブラーニングを主体とした授業を希望する意見が多かったことを示した。2018年度にも、2017年度と同様のテーマで討論会を実施したが、やはり、アクティブラーニングを主体とした授業を考えたグループがほとんどであった(表1)。

2018年度の討論会において、学生が提案した授業をみると、地域創生に関するプロジェクトを行いたいという内容があった。専門学部学科であれば、プロジェクトが専門科目の一部として行われることで継続的な教育研究の発展に繋がっていくことは明白であり、また、学生個人においても卒業研究などに繋がっていくことで学習成果としても十分な効果が期待で

き、望ましい姿であると思われる。教養科目についても、プロジェクトを設定し、同様の学習目標等を立てることができれば、専門学部学科と同様の効果が期待できると考えられる。

表 1：2018 年度 フクトークでの学生の提案内容

タイトル	内 容
地域“ミライ”プロジェクト ～みんなでビジネスやろう ぜ！！～	地域学群で学んだ内容を生かすために、地域での行事などの見学や参加体験を通じて、活性化策を考えビジネスプロジェクトを立ち上げ、実行する。
超短期インターン。	地域の中小企業において、講義内で擬似的にインターンシップを行う。
新たに味わう食文化	地域の人と交流して地域の食文化について学び、さらに地域の特徴を知ること、新しい料理などを考える。
他県のふりみて我町なおせ	他地域の町おこしに関わっている方に来てもらい、成功している事例を学び、地域に足りないものを探して、新しい町おこしのプランを考えて提案する。

一方で、教養科目においては、プロジェクトに沿ったカリキュラムを組むことになると、年度が進むにつれて徐々に専門性が高まることになり、それにつれて学習目標も高くなっていき、主に1年次生を対象とした基礎的な授業科目としての実施が困難になる可能性がある。年度が変わっても学生にとって同質の学習目標が達成でき、かつ、地域創生に関わるプロジェクトを考える必要がある。また、当然であるが一度立ち上げたプロジェクトについては、継続的に実施しなければならないため、年度が変わってもある程度の人数の受講生を確保する必要がある。

このように学生が主体的に関わるアクティブラーニングの要素を持った授業を提案する一方で、座学である「備後地域学」については受講生が比較的多い（100～200名程度）が、アクティブラーニングを主体とした「備後に学ぶ地域の課題」と「松永に学ぶ産業と文化」についてはそれぞれ10名程度と3名程度と少なく、教養科目におけるアクティブラーニングの活用が学生にとって必ずしも魅力的でないことを鶴崎（2018）²（pp. 76-77）で示した。

これらの科目については、地域で活躍する人材の輩出を使命と考えている大学にとって重要な授業科目であるとの認識から、受講生を少しでも増やすために、受講に関する配布資料に地域学に関するものを加える、また、履修期間中に他の教養の授業中やインフォメーションディスプレイなど複数の方法で紹介するといった取り組みを行っている。しかしながら、2018年度においても履修者の増加の傾向は見られなかった。（2018年度履修者数：「備後地域学」99名、「備後に学ぶ地域の課題」6名、「松永に学ぶ産業と文化」3名）。

学生の希望する学習形態と実際の学生の受講志向に乖離があるという事実は、大きく2つの問題がある可能性を提起していると思われる。

まず、「授業の設定（課題等）が適切でない」、「担当教員の能力が不足している」といった教員側の原因が考えられる。3つの科目すべてが開講されてからの期間が短いため、教員側の経験値が低いことも要因と考え、学生対応の向上を目指すとともに、上述の「3.地域学科目の現状と課題」に示した課題の解決が必要と思われる。

また、学部学科の専門科目と関係ない教養科目について「時間を割きたくない」、「フィールドワークは面倒だ」、「討論などしたくない（面倒だ）」、「自分で調べるのは面倒だ」といった学生側の意識にも原因の一端があると考えられる。このような意味では、学生の教養科目全般に対する意識との関係において、アクティブラーニングを中心とした「備後に学ぶ地域の課題」と「松永に学ぶ産業と文化」は学生の志向とすれ違った科目となっているのかもしれない。

これらを解決するためには、学生にとって専門科目との繋ぎという面での関連性の明確化

も重要である。特に、「松永に学ぶ産業と文化」においては、この点を考えたシラバスの作成、また、受講を検討している学生にそれぞれの所属する学部学科の専門科目への繋ぎを考えた課題設定を考えた内容説明を行っている。残念ながら、現時点では、担当教員の能力不足なのか、講義内容の面倒さなのか、あるいは両方なのか明確ではないが、受講生の増加につながっていない。

分野横断的な学際的学問領域である地域学において、アクティブラーニングが重要な学習手法であることは明白であるので、学生の志向にも合い、かつ、学習に適した魅力のある課題設定を模索する必要があると思われる。

5. 学習科目としての地域学の可能性

地域学は非常に学際的な学問であり、教養科目としては最適な学問であることは鶴崎(2018)²(p.72)でも述べた。日本学術会議の提言⁴においても、「市民的教養」の重要な要素を占めていると考えられ、学問研究分野としても発展が期待される。上述のように、教養教育科目としては、最適な内容と考えられる。

一方で、分野横断的な学際的学問領域であるとともに、社会情勢等の激しい変化の影響を受けやすい学問領域でもある。このことは、授業を展開する上において、歴史研究以外の分野については、常に内容を更新する必要があるということである。特に「備後地域学」においては、行政担当分野を中心に講義内容の変更、更新を行っている。受講生にとっては、「備後地域学」において知識として得られる内容は受講する年度によって異なるものの、地域への興味関心を涵養するという学習目標については、同質の効果があると考えている。

「備後に学ぶ地域の課題」と「松永に学ぶ産業と文化」については、それぞれのテーマに応じた最低限の知識は必要となるが、知識の応用能力、課題解決能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力など多岐にわたる能力の向上を学習目標にしている。これらの学習目標を達成するためには、知識をもとにしじっくり考える思考の時間、グループ内での活発で真剣な議論、独りよがりにならない説明用資料や発表原稿の作成、そして、他者への説明に耐えうる知識の上積みなどが必要となり、学生にとって負担感の大きな授業となると考えられる。「備後に学ぶ地域の課題」を受講した学生の感想にも「グループ活動も全く話したことがない初対面の方とでしたが、ちゃんと話すことができたので良かったです。正直、あまりに知らない人だらけだったので、人見知りの私にはちょっと辛く、やめようかと思いましたが、やめなくてよかったなと思えるような授業でした。(2017年度)」、「プレゼンやコミュニケーションがいかに難しいか改めて分かった。今後の授業や活動に活かせるのではないかと思う。(2016年度)」、「グループワークでの積極性、主体性がいかに重要なものか知ることができた。今後やっていくうえで、役に立つのではないかと思う。(2015年度)」との記述があり、学習を進める上での難しさが示されている。それと同時に、受講した学生にとっては学習の達成感を感じ、今後の学習活動への積極性を高めることにつながった、換言すると、このような感想を書いた受講生にとっては学習目標を達成できたということも示されている。なお、ここで学習目標となっている能力は、専門学部学科においてアクティブラーニングを用いた授業や実習においても向上が図られる。専門学部学科においては、それぞれの分野の学問研究と連動していることが多く、学生にとっては学年進行に応じて専門的知識レベルの向上はもとより、学問研究の進展に寄与しているという意識も持つことができ、同様の学習目標を持った学習に対してもモチベーションを高く保つことにつながると考えられる。ところが、教養科目である「備後に学ぶ地域の課題」と「松永に学ぶ産業と文化」については、学生にとっては単発的な科目、つまり、学習目標を達成するために必ずしも地域学の学問研究の進展への寄与は問われないように捉えられ、上述のように教養科目について「時間を割きたくない」、「フィールドワークは面倒だ」、「討論などしたくない(面倒だ)」、

「自分で調べるのは面倒だ」といった学生側の意識が影響し、学習を継続するモチベーションはもちろんであるが、学習を開始する意欲すら持てない可能性がある。

そこで、学生へ地域学の受講を促し、かつ、モチベーションを高めることも目的として、鶴崎(2018)²の図1(p.75)に示したように3つの科目を有機的に結びつける設計にし、「備後地域学」は2013年から、「備後に学ぶ地域の課題」は2015年から、松永に学ぶ産業と文化」は2016年(初年時は受講がなく、実質的には2017年)から開講している。残念ながら、この概念を踏まえて上述のように受講生募集の広報を行なっているが、学生には十分に周知されておらず、それぞれの科目を有機的に履修した学生は現時点で皆無である。科目履修が積み上げ式でなく並列的に行われる教養科目としての現状の限界かもしれない。

大学においては、学生はそれぞれの専門学部学科に所属し、それぞれの分野の専門的知識や技能を習得して社会へ出ていくことが目標となっている。一方、社会的には限られた専門性よりもより汎用化できる知識や能力が期待されている。鶴崎(2018)²の図3(p.80)に示したような地域と連携した資格認定のような設計ができれば、専門的知識や技能のみならず、市民的教養を持つ人材の育成ができると思われる。「備後に学ぶ地域の課題」を受講した学生の感想(2015年度)に以下のものがあつた。「今回地域学の授業を受けたことにより、地域に興味を持ち知る大切さをフィールドワークを通して身をもって感じた。それは地域社会に生きる者としての重要な責任であるが、なかなか学ぶ場がない。福山は自分の地元ではないものの、今回の授業学べた社会や地域での生き方はこれからどこに行っても通用すると思うし、何より地域の成り立ちを学ぶことがとても楽しかったので、ぜひ多くの人に履修してもらえたらと思う。授業内では課題としてHPやパンフレットを作成したが、その完成度は十分に目標を達成できたものとは言えなかったかもしれない。週に一回の授業からさらに内容の濃いものにするにはどうすればよいか課題だと感じた。また今回は市の河川がテーマだったが、他のテーマに関しても多く知りたいと思ったので、自分で情報を探してみたいと思った。加えて、今回は福山市役所でお仕事をされている方に講師をしていただいて、芦田川以外にも、コミュニケーションの仕方や、仕事についてなどのお話が聞けたので、それがとても勉強になった。いろいろな立場の人から話を聞ける機会がたくさんあるといいと思った。このような授業が多く展開されればと思う。」。地域学を核とした「くさび形」のカリキュラムを実現することができれば、地域に貢献できる人材育成にとって大きな可能性を秘めていると考える。

6. 研究分野としての地域学と地域貢献の可能性

大学においては、学生教育とともに研究活動とその成果を活用した社会貢献が重要な役割である。地域学も教養科目の一科目群として位置づけられているが、そこで提供される講義内容、フィールドワーク、グループワーク、また、個々の学生の調査の結果など、以下に示すような成果の積み重ねを有機的につなげることで、学際的領域としての研究成果が十分に得られると考えられる。

これまでの「備後地域学」の講義内容や「備後に学ぶ地域の課題」で提供された知識やグループワークの成果は、備後地域にとって重要な知識としてまとめられる可能性があり、その成果を公開することで社会貢献できる可能性もある。2017年度には、「備後に学ぶ地域の課題」の成果をラジオ番組で公開した。また、「松永に学ぶ産業と文化」については、松永はきもの資料館で成果発表会を開催(2018年度は「備後に学ぶ地域の課題」も同時開催)し、地域に公開している。松永はきもの資料館で成果発表会については一般の聴衆が少ない状況にあるのが残念だが、学生の学びの場であると同時に、地域への知識の還元と新しい発想を得る機会と考え、継続的に実施することが重要と考えられる。

また、「備後に学ぶ地域の課題」ではこれまで芦田川のイメージアップをテーマに学習を

進めたが、学生の考えた企画の中には、芦田川の生物に興味を持ってもらうためのイベントでのガチャガチャの作成⁵、芦田川をイメージした移動水族館⁶など、行政や地域企業などとタイアップできれば実現可能と思われる提案もあった。これらを地域と協働で進めることができれば、上述の共通教育科目の改善を目的とした学生による討論会での提案のように地域貢献プロジェクトとなりえる可能性がある。ただし、このような発展的学習を授業の一環として行い、そこでの成果を評価することは難しい。昨今、地域企業の協力で行われているインターンシップと同様の評価方法を採用し、新しい科目設定を行うことも考えられるが、継続的に実施可能な科目となるかどうかを慎重に検討する必要があるだろう。

さらに、上述の討論会での提案（表）にあった「他地域との比較」は、学習課題となるだけでなく、比較社会的な観点からも重要と考えられる。グローバルな社会環境にある現在では、国内の他地域との比較だけでなく、諸外国との比較も可能である。2018年度の「松永に学ぶ産業と文化」を受講した学生が、ブーツや雪靴の起源について調査した際、日本語のホームページ等にある情報だけでなく、英語やノルウェー語などのホームページについて翻訳ソフトを使いながら調べた結果、日本語のホームページでは得られなかった情報を得ることができた。インターネット上の情報については信憑性の確認など注意が必要ではあるが、現地に行くことが困難な地域と比較検討する助けとなるのは間違いなく、特に教養科目レベルでの地域学の重要な学習ツールとして活用できる。さらに、昨今の情報技術の進歩によって、諸外国の情報もリアルタイムにそして言語の知識に縛られることなく容易に得られる状況になっていることから、限定された地域でのフィールドワークなどに頼る研究についてだけでなく、グローバルな観点も含む専門的比較研究への発展の可能性もあると考えられる。

注

- 1 福山大学ホームページ 研究・産学連携 助成金事業・プロジェクト 福山大学ブランディング推進のための研究プロジェクト。 <http://www.fukuyama-ac.jp/research/project/branding.html>
- 2 鶴崎健一、「教養科目としての地域学の課題と展望—福山大学での取り組みを例として—」福山大学大学教育センター『大学教育論叢』第4号、pp. 69-81、2018年。
- 3 福山大学授業評価アンケート（2016年度、2017年度）および同様の内容での独自アンケート（2014年度、2015年度）において受講生に講義の満足度を5段階（5：満足、4：ほぼ満足、3：どちらとも言えない、2：やや不満である、1：不満である）で評価してもらい、それを平均した値である。
- 4 「日本の展望—学術からの提言 2010 21世紀の教養と教養教育」平成22年(2010年)4月5日 日本学術会議 日本の展望委員会 知の創造分科会。 <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-tsoukai-4.pdf>
- 5 鶴崎健一、「「備後に学ぶ地域の課題」報告」福山大学大学教育センター『大学教育論叢』第3号、pp. 1379-140、2017年。
- 6 鶴崎健一、「平成29年度 教養教育科目F群（地域学）報告書 「備後に学ぶ地域の課題」実施報告」福山大学大学教育センター『大学教育論叢』第4号、pp. 183-186、2018年。